

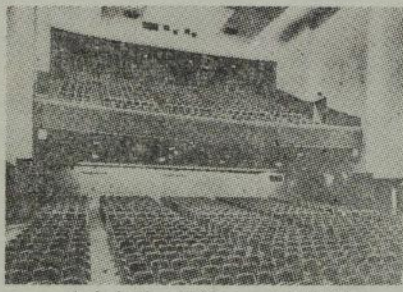
全佛通信

聖徳太子を現代に生かせ

九州大学名誉教授 長 沼 賢 海

六月号
発行所 全日本仏教会
東京部中央区築地
三ノ木朝寺町
電話 03-322-
振替東京 3330
発行人 栗本俊清
編集者 別所弘因
印刷所 ルンビニ社

聖徳太子は、摂政肇国皇太子である。肇国（はづくに）摂政（しらせらるる）皇太子（ひつぎのみこ）である。日本紀に拠れば、神武天皇と崇神天皇とが「はづくにしらすらすみこと」であるが、それは伝説的存在に過ぎない。真に日本を肇めて創建したのは聖徳太子である。此のころ「国造り」、「人造り」が時代標語の如く宣伝されているのであるから、日本の国造り、人造りの根本的開祖である。太子の政治ほど現代政治の基本とすべき、必要のある時代はない。太子が理想的な体系を有するような国造り政治のうちで、最も重要なものは、国史の編纂と憲法の制定であろう。太子は国史を作つて民族の過去について反省すると同時に、将来の夢の国の先例を描こうとしたようである。神武天皇の建国の歴史は、実は太子の建国事業の反映であったのである。神武天皇の皇居、皇都設定の詔に、八紘を以て宇となし、六合を包



大会会場・電気ホールの内部

紀は国家の語を朝廷又は皇室の意に用いている。万葉集にもこの用法がある。国家を皇家の意に用いているので、国家の意味をあらはす為、八紘、六合、区宇、区夏、

ねて皇都となすの語あり、戦前は彼の東亜共栄圏の理想の歴史の根拠としてこの詔があげられたが、八紘も六合も国家の意であつて、海外を含むの意は全くない。日本

天下等、大きな範囲を示す言葉が用いられている。詔の意は新皇居は、皇氏族だけの家ではない。全氏族の同居の為めの家であり、この皇居の所在地が傍山の東南だけが都であるのではない。各氏族の割拠する全地域が都である。云々其の意は理想の国家人民は全民族の一体であつて、君臣は即ち父子であるといふにあらう。神武天皇の時代にこうした国家観がある筈がない。太子は辛酉の年に御殿を造営し、甲子の年に十七条の憲法を制定しているように、神武天皇も辛酉の年を以て即位し、甲子の年を以て大嘗祭を行つたとしたのであつたらう。いわば太子は、理想国家の国造りを、まづ神武天皇をして初演せしめたものであらう。太子がこの理想国家の国造りの大方針を示したのが十七条憲法である。神武以来の当時の各氏族は、それぞれ歴史を異にしている。蕃別氏族という外国移住の新氏族あり、勢最も盛んであつた。旧氏族にも其の家系神代以来にあつたという神別氏族あり、皇族から分家した皇別氏族あり、三氏族それぞれ土地人民を私有して勢力を固め、残酷な苦闘は物語り以上であり、その熾烈なる抗争は、今日の政党間の軋轢、階級闘争、労働の悪闘も比較にはならない。太子の理想の国とは雲泥の差があつたのである。

太子の国造りの基本として制定した憲法の第一条は序分であつて、全条の眼目を示し、この序分について正宗分たる十五の簡条を展開した。憲法の性質上流通分の記載にかえて第十七条は結分として序と首尾をなしている。まづ序に和をあげ、正宗分、即本論の最初条（憲法第二条）にこれを受け、かねて仏教の信仰を全十五条の裏附けとした。まづ和の貴い所以は、孔子の語（論語）を以てあらわし、本論第一条に依つてこれを強化した。ここに四姓の終耀万国覇極の宗教と称しながら、仏教と云わずして三宝と称したのは、特に僧宝を指摘しようとしたものではあるまいか。僧は具さには僧伽で、原語の音訳語である、僧の字に出家、比丘などの訓意があるようになったのは、其の原語の意が転用されたのである。支那南北朝の頃には、僧字を用ひた俗人の名が少くない。勿論出家比丘という意味に關係はない。三宝の種類及びその体性については、所説種々あり、華嚴經に説く同相三宝の僧宝を、和合の義と説くという。普通には、僧を訳して衆とする。然らば僧とは法の修行に和合する衆徒の意なるが如くである。和の貴き所以を序文の冒頭に説き、本論第一条に仏の教え亦和合協同を宝とすると述べ、梵漢両面から和の貴さを主張した。時弊を改めて国造りを開始せんとする者の至当の構想である。

現在の日本歴史教科書は悉くと云つてよい程、十七条憲法を説明して和を説くとのみいふのは、仏像を造つて開眼しないようなものである。憲法の肝心な和はいかにして将来されるかを説くところにある。憲法にはこれに代えて曰わく、「必ず事をあげつらう（論）に諧つて」、始めて和は将来されるところとする。事を論らうとは、衆議を尽して公論、世論に帰着することである。そして序論を受けた結論の憲章に「夫れ事は独り断すべからず、必ず衆（もろもろ）と論（あげつらう）べし」とあり、「衆」といふ弁ふる時は、こと即ち理を得」とある。今日の如く国内に於ける保守革新の対立に処し、又国際危疑の深刻に對し、話し合いの外急場を救う法策がないといわれる。この話しあつて公正を求めるといふのが、太子の和の為めの根本策として強調してあるのである。

太子信仰の復活される鎌倉時代の武家の憲法（貞永式目）は、十七条を三倍して五十一簡条をたて、初条に神社仏閣を大切にせよとあり、十七条憲法本論の第一条に對照させたものであらう。そして其の評定衆の合議政治をきめたのも太子の主張を取入れたのであらう。肥後の菊池武重の三箇条憲法に、内談衆（評定衆の類）の合議に際し、衆議の賛成がなければ、主人といへども其の議を撤回すると規定してある。

ここで私は切に大方の示教を乞ふことがある。明治元年の五条誓文の案文は、大政奉還後、天朝の施政の大方針を討議した土佐の福岡孝弟、と越前の由利公正が合作したものである。其の第一条の會議政治の主張は、熊本の横井小楠の政治思想が由利公正に通ずるところがあり、而して小楠のこの政治思想は、菊池の三箇条憲法の感化もあるといわれる。老生はこの説の出所を忘れた。横井小楠遺稿等をしらべ、この方面の権威者であつた徳富蘇峰氏にもたづねて見たが分らなかつた。多分出所は熊本

中国仏教協会代表来日

日中両国の親善に多大の成果

戦後はじめての正式訪問



趙 朴 初 氏

本年はわが国に中国仏教文化を招来し日本仏教史上に偉大なる足蹟を印した盲目の聖者、鑑真和上円寂一千二百年にあたり、全仏ではこのほど中国仏教協会副会長趙朴初氏を団長とする中国仏教訪日友好代表団四名を招聘し奈良東大寺、横浜鶴見の大本山総持寺における鑑真和上円寂一千二百年記念

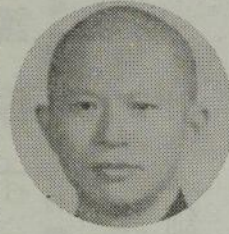


正 果 法 師

大法要に出席を要請し、その後各地の各宗本山等を巡回し、各所で熱烈な歓迎をうけ、日中両国の仏教による友好親善の増進を一層深めた。

中国仏教訪日友好代表団は、さる五月五日夜十一時四十分羽田着のBOAC機九三〇便で香港経由で来日し、全仏金剛理事長以下多数の仏教徒の歓迎をうけ、特別

控室にて少憩記者会見の後、直ちに自動車三台に分乗し、夜半すぎ一路奈良へ向った。翌六日午前十時から東大寺で行われた鑑真和上円寂一千二百年記念大法要に参列、焼香され、ひきつづいて唐招



一 如 法 師

提寺を訪れ参拝のち同夜は黄粟山万福寺に宿泊、七日は宇治平等院、延暦寺、智積院の各山を参拝し、午後六時から京都本願寺白書院における全仏主催の歓迎会にのぞみ、同夜妙心寺で宿泊された。次いで八日は金閣寺、西本願寺、知恩院等へ参詣し、華頂会館における記念講演会に出席し挨拶



葉 氏

をなした。九日は妙心寺から大阪へ向い、途中松下電器を見学し、更に東西両別院、日立造船を廻り、夜は大阪府仏教会主催の歓迎

会に出席し、同夜四天王寺で宿泊されたが、十日は高野山を訪れ、金剛峯寺など山内諸堂に参詣、十一日福井県大本山永平寺、十二日総本山身延山久遠寺をそれぞれ参拝され、夕刻自動車にて横浜鶴見の大本山総持寺へ到着した。長途の旅のつかれを癒す間もなく、十四日には鎌倉の円覚寺、建長寺及び都内各宗大寺院を訪れ、交流を深め十五日は、築地本願寺、全仏事務総局、増上寺、上野博物館

中国仏教協会 代表歓迎委員会

- 委員長 金剛秀一
- 副委員長 訓親信雄
- 顧問 高階龍仙
- 員 員 太田淳昭
- 金子弁浄
- 清水祐之
- 上野頼栄
- 野村宗春
- 清田寂坦
- 曾和探文
- 宮裡頭秀
- 岡本静心
- 高峰秀海
- 佐藤泰舜
- 奥 博良
- 村野宜忠
- 竹村教智
- 菅原惠慶
- 中野義照
- 半田孝海
- 村瀬玄妙
- 五十嵐賢隆
- 三谷会祥
- 佐瀬淳光
- 石川存静

- 阿部竜伝
- 大谷登淵
- 岩野真雄
- 倉持秀峰
- 末広愛邦
- 長岡慶信
- 平林有高
- 山本 杉
- 叔南覚成
- 上野澄園
- 塚原徳応
- 望月日有
- 室峰梅逸
- 間野敬重
- 壬生台舜
- 塚本善隆
- 竹田淳照
- 永野鎮雄
- 船口暉文
- 船田無字
- 牧田諦亮
- 中濃教篤
- 白山亮一
- 栗本俊道

等を訪れ、東京の夜景も観賞された。

十六日には正午から総持寺に於て、日本仏教会との懇談会、ついで三時から全仏主催の鑑真和上円寂一千二百年記念大法要に参列、ひきつづいて歓送会に出席し、仏教による日中両国の友好増進を誓い合った。十九日午後五時一行は、仏教による両国の親善の実をあげ、清水谷全仏副会長ほか多数の仏教徒の見送りをうけBOAC

機で空路香港へ向った。

代表団の氏名は次の通り

- 団長 趙 朴 初 氏
- 中国仏教協会副会長 正 果 法 師
- 中国仏学院教務処主任 一如法師
- 中国仏学院研究生 葉 啓 鏞 氏
- 中国外交学会職員 趙 朴 初 氏

(事務局)

- 狩野獲麟
- 清水得竜
- 水谷英俊
- 佐藤孝全
- 伊原一道
- 柳 了堅
- 別所弘因
- 岩本昭典
- 森本三鑑

局 主 次 局

- 長 白山亮一
- 長 石川存静
- 長 清谷得竜
- 員 柳 了堅
- 員 伊原一道
- 員 鎌田良昭
- 員 伊東堅純
- 員 柱松青樹
- 員 梶原隆也

(○印は実行委員。順序不同)

寺院教化功勞賞の設定

神田寺仏教文化センター落成記念

- 副賞五十万円を贈呈
- 今年12月8日(成道会)に発表予定

多年独力で教化事業に専心しておられる中小寺院の中から審査の上おおむね5ヶ寺をえらび一口10万円宛贈呈して現在必要な教化材購入費の一部に使用していただく

- 応募並に推薦の方法、その他詳細については、6,7月号にてお知らせ致します。

38年 5月

宗教法人 神 田 寺
真 理 運 動 本 部

祝 第十一回全日本仏教徒会議九州大会

真言宗・天台宗器具

田中伊雅仏具店

京都市下京区仏具屋町万寿寺角
電話 〇二五八四番
振替 大阪 八七八番

各宗寺院御用達

御祈禱用護マ木
高野山霊木ハデの木使用一座用百円(葉種別)
他に板塔婆、経木守、護マ札注文に応じます
御注文は早い目に願います。

和歌山県高野山五の室

恩地護摩木店

電話高野局五四四番

計 70円

御紋章代 10円

御印入 15円

(色) 60円

(価格) 70円

磁磁 120円

白と白 300個以上印刷は1割引

小型 300個以上印刷は1割引

中大型

記念品団体募金に最適です。
現品見本二百円也(小型二個
カタログ進呈登録番号第一三六八二二号許可済

代理店

京都市下京区花屋町通
油小路角 大乘苑

神仏陶器卸
マツチ消し本舗
川本商店

東京港区赤坂福吉町
電話四八一三九一六
振替東京一五五一〇六

抜群の妙音!

それは岩沢の鐘!

青木・藤原・土居博士指導

岩沢梵鐘株式会社

京都市右京区太秦唐渡町二二
トロボス梅津終点
電話サガ〇二五七・一三二三番

◎各宗本山寺院仏書經典刊行

◎各種御守護札仏像画表装

◎寺院教会神社特種印刷加工専門

▽総営業カタログ進呈します

和歌山県(高野局区内)高野山

各宗本山御用達

松本日進堂本店

電話高野局一〇二・一三四番
振替大阪二二二九九番

葬祭部・造花部・仏壇部・貸衣裳部

久留米市通町3丁目(TEL(2)8981)

福岡県冠婚葬祭互助会
木下株式会社

社長 木下 勇 久留米市本町3 TEL(2)4124

本社 久留米市通町5 TEL(2)2686.7834.898

営業所 福岡市 平和台球場前 TEL(7)46014.7014

大川市 市役所前 ≪ 3304

田主丸 中央バス停横 ≪ 2870

城島 城島町 ≪ 6152

善導寺 矢ヶ部呉服店内 ≪ 13

朝に礼拝 夕に感謝

昔も今も輝く京仏壇と

時代にマッチした合掌壇は

仏壇のメーカー若林へ

京都市七条通新町東入
電話三七〇二二四・三三三・三三三